国土文化再興へ日本風景街道大学

宮崎大学で開かれた風景街道大学

日本風景街道大学が1月、宮崎大学で開かれた。テーマは「生み出す～地域の力」。資源・魅力・誇り・つながり・お金……主体によって生み出す物のとらえ方は多様だ。生み出すことで何をもたらすのか。そのプロセスはどのようなものかなど、様々な立場からの講義があった。

内容は「風景街道大学の趣旨」「地域資源をクリエイトするプロセス」「全国の取り組み～地域資源とツーリズム」「クリエイトの現場から～各地の挑戦」など。事例として「日南海岸恋人ロードの取り組み」と「鵜戸神宮とサイクルツーリズム」が発表された。

風景街道の運動を広め、深めようという風景街道大学という公開講座は、宮崎大学では数回開かれている。その大学に昨年4月「地域資源創成学部」という新たな学部が開設された。教授に就任した熊野稔氏は、「道の駅」の制度創設前から道の駅に関わってきた道の駅の研究者。地方創生には、道の駅と風景街道の連携強化がさらに求められるようになると話す。

日本風景街道は、郷土愛を育み、日本列島の魅力・美しさを発見、創出し、様々な主体が協働して景観、自然、歴史、文化などの地域資源を活かして国民的な原風景を創成する運動を促すことで地域活性化、観光振興に寄与し、国土文化再興に役立てるのが目的である。

風景街道大学も公開講座として各地で行われるようになった。今後の方向性として、道路と道の駅そのものの景観向上と、道路と道の駅から見た風景の景観向上といった、風景街道と道の駅との連携が求められると熊野教授。宮崎大学に誕生した新学部は、その担い手にうってつけだ。

地域社会は、少子高齢化・人口減少、グローバル化など様々な課題に直面している。少子高齢化が加速度的に進む中山間地域を抱え、後継者不足や若者の県外流出に悩む宮崎県などの地域は、持続可能な地域創成と地域産業の振興が何より重要で、風景街道の活動にも期待がかかる。

ロゴマークはコシノジュンコさんが手がけ、日本の象徴富士山をモチーフに、歴史や文化が道路を介して未来へと続いていくことへの願いをこめて表現した。

日本風景街道

本紙も連載で紹介

創刊50号を機に本紙と風景街道の歩みを振り返る。

本紙が、日本風景街道の活動を初めて紙面掲載したのは2006（平成18）年7月の第8号。6面全部を使い、動き始めた活動や取り組みの意義を展望した。日本風景街道戦略会議（会長奥田碩日本経団連会長＝当時）が「風景街道」の理念、目的、仕組みなどを提言したことは07年4月の13号で紹介した。

同年10月の15号1面で日本風景街道の登録開始を報じ、連載第1回は2～3面見開きで島根県松江市周辺のルート「ご縁をつなぐ神仏の通ひ路」の活動を紹介。16号からは4～5面見開きで連載が定着。第1次連載は予告編を含め9回続いた。

風景街道の活動をさらに盛り上げようと12年、ロゴマークを制定。本紙も8月の35号で「日本風景街道 登録127ルート全国図」（12年3月当時）を掲載＝**写真**。地域活性化への連携を呼びかけた。

第36号（12年11月）では、全国初の風景街道サミットの模様を詳報。以後49号まで、毎号2カ所程度ルートを紹介、欠かさず掲載してきた。

美しいところに作りましょう

景観楽しむ道の駅

熊野稔教授

平成5年に道の駅の登録案内制度が始まって今年で24年。発足当初の103駅から今では全国1107カ所にまで増えました。全国の道の駅に無償配布を続けてきた道の駅の新聞「ルートプレス」も記念すべき50号を迎え、心よりお祝い申しあげます。

私は、平成3年に山口県で社会実験に参加して以来、道の駅の虜になり全国行脚してきました。地域振興や地方創生に寄与する道の駅はさらに広がり、役割がさらに進化し多様化しています。「休憩、情報発信、地域連携の機能を持つ個性豊かな賑わいの場」の定義を持つ道の駅は、地元地域資源を直売し、あるいは加工・販売の6次産業の支援拠点として、地域経済に役立っています。

地域ぐるみで活性化に取り組む宮崎県の山間部の道の駅「酒谷」

さらに災害支援系として、今では度重なる大地震等の災害を支援する機能を持つようになりました。阪神淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災、熊本地震と、道の駅が1次避難場所となり、さらには災害支援の中継基地となって、道路利用者はじめ周辺地域の人々に貢献しました。

過疎地では救急車やドクターヘリの中継地点となって患者の輸送を助けたり、医療情報を提供するなど、リスク管理を担う命の駅にもなっております。

福祉・買い物難民支援として、過疎地や中山間地域では生活をしていくのに、食料品等の買い物に難儀をする地区が増えましたが、道の駅が社会福祉協議会の事業等を活用して独居老人の宅配や御用聞き、安否確認をするようになってきました。

また、人材育成の場として、学生のインターンシップ、ボランティア受け入れ、職員研修の場として機能しております。平成27年2月、全国「道の駅」連絡会と宮崎大学とが道の駅で就労体験型実習を進めることを合意し、全国初となる基本協定を締結しました。地方自治体職員の研修の場や中学生のボランティア活動、高校生の地元産品を販売しています。

電気自動車の充電場所、RVパークとしてのキャンプ宿泊場所、特産品等資源開発の拠点、地域の観光案内・予約場所、情報提供の窓口、役場の手続き窓口、地区住民のコミュニティと交流空間など、様々な機能が広がっています。町の土地利用においても、道の駅を中心に生活の拠点が集約化され、隣接してコンビニや店舗、郵便局などの利便性の高い施設が集まり、地方創生を支援する小さな拠点づくりとして機能してきました。

車を運転して道の駅でほっとする居場所を提供し、景観の美しいところに道の駅ができると、観光場所としても景観を楽しむことができます。今後は道路景観の向上や風景を楽しむことと合わせた道の駅が、さらに求められるのではないかと思います。

宮崎大学地域資源創成学部教授　熊野稔

■東京湾岸で国際森林デーイベント

毎年3月21日は、森林や樹木に対する意識を高める記念日として国連総会で定めた「国際森林デー」。わが国でもこの日を中心に各地で関連イベントが実施されているが、林野庁、東京都港湾局、公益社団法人国土緑化推進機構、同森林文化協会などで組織する実行委員会は3月25日午後、東京湾岸の埋め立て地「海の森」で、「『国際森林デー2017みどりの地球を未来へ」～海の森と国際交流～』を中央行事として開催する。

駐日各国大使館や国際機関の職員と家族、公募に応じた一般市民が参加、海の森で植林をした後、周辺を見学したり国を分け隔てしない交流を楽しんだりする。

■木材活用の知恵テーマに討論

「いま　なぜ木か――日本が世界に誇れるもの」をタイトルに掲げるフォーラムが3月20日、東京・中央区京橋のイトーキ東京イノベーションセンターで開催される。公益財団法人国土緑化推進機構、毎日新聞社などの主催。

地球温暖化防止に有効であるとして、木材の活用は今や世界の潮流といわれるが、日本はどうだろうか。木材を活用するユニークなコンセプトで新国立競技場の設計を担った建築家隈研吾氏と、宮大工西岡常一氏ただ一人の内弟子となった小川三夫氏による基調講演の後、小川氏と学識者らによるパネルディスカッションが行われる。

■熊本復興支援「くまモン」バッチ

公益社団法人国土緑化推進機構は、熊本地震の復興支援に目的を限定した「緑の募金」活動を展開しているが、募金呼びかけのため熊本県産のスギを使用して、「くまモン」の顔を形どった木製チャリティ・ピンバッチを熊本県内で製作した＝**写真**。募金呼びかけのイベントなどで配布しているが、東日本大震災復興支援以来続けている「みどりの力で、日本を元気に」という復興アクションの趣旨をさらに広くPRするため、募金や募金活動への協力を申し込む人には特別に配布することにした。

同機構ホームページ（http://www.green.or.jp）の「お問い合わせ」（または電話：03-3262-8451）に必要事項を記入し、届いたピンバッチに同封の振込用紙で募金または募金活動協力を申し込む。